校長室だより　7月

2023(令和5)年7月3日
大阪市立天王寺小学校
校 長　藤 原 和 彦

どんな思い出もいつかは…

あと2週間ほどで1学期が終わります。まだまだ梅雨の真っただ中ですが、終業式のころには梅雨も明けて、朝から暑い毎日になっていることでしょう。

4月の始業式で、2年生以上の子どもたちに「今年頑張りたいことは何ですか？」と聞いて、その後に答えを書いてもらいました。昨年と違って、今年の質問は大まかな聞き方だったので、いろんな答えが返ってきました。中でも多かったのが、勉強についてです。「漢字や計算を頑張る」と書いた子や、「テストで100点取る」という子もいました。当たり前といってはそれまでですが、みんな勉強ができるようになりたいのですね。でも、そのためには、毎日学校で受ける授業や家庭や学園で取り組む宿題などを、こつこつと積み重ねる必要があります。さて、天王寺小学校のみんなはそうした努力をしてきたでしょうか。もし、子どもたちの中に、この文章を読んで（もらって）ドキッとした人がいれば、今からでも遅くはありません。ぜひ、残り2週間を頑張ってから、夏休みを迎えてほしいと思います。

ところで、夏休みと言えば、どこかに出かけて、普段できない経験をする人も多いと思います。私が小学生のころは、毎年、家族や親戚の人と一緒に、田舎に行って過ごしました。田舎と言っても、昔祖父母が住んでいた木造の古い家があるだけで、普段は誰も住んでいません。そこに、夏の間だけ親戚たちが替わりばんこに十数人集まって、何日も一緒に過ごすのです。

その家は、瀬戸内海の島にありました。今では、しまなみ海道という橋で本州や四国とつながっていますが、当時は、新幹線と在来線を乗りついで広島県の尾道まで行き、そこから水中翼船という、ものすごく速いけれど、ものすごくやかましい船で島に渡る一日がかりの長旅でした。

昔、農家をしていた祖父が住んでいた家は、田んぼに囲まれた中にポツンと建っていました。玄関から中に入ると広い土間があります。電気やプロパンガスはあるけれど、お風呂は薪でたく五右衛門風呂です。網戸なんかありませんから夜寝るときは、大きな蚊帳の中で寝ます。まるで、となりのトトロの世界そのままです。朝早くに、いとことクヌギ林に行ってカブトムシを捕まえたり、昼は海水浴に行ったり、夜には花火や影絵遊びをしたりと、楽しい毎日を過ごして忘れられない思い出をたくさん作りました。

しかし、忘れられないのは楽しかった思い出だけではありません。3年生の夏休みは、都合で家の人が来られず、我が家からは兄と2人だけの参加になりました。そうすると、昼間は楽しい事がいっぱいでも、寝る時になると何だかさみしくなるのです。眠れなくて気をまぎらわそうとトイレに行くと、そ

れが逆効果。トイレは家の外にあって、しかもくみ取り式です。真っ暗な中、田んぼからカエルの鳴き声だけがやたらと大きく聞こえてくるので、必死になって用を済ませて戻り、慌てて布団に潜り込みました。すると、さみしさに怖さまで加わって、ついには泣きながら眠ってしまいました。

今では笑って話せる体験ですが、その当時の私にとっては、結構ショッキングな出来事でした。

さて、この1学期間、子どもたちは、たくさんの経験を学校で積みました。もちろんすべてが楽しく笑いに満ちた経験であれば何も言うことはありませんが、中には嫌だったり、がっかりしたりという事があったかも知れません。しかし、人にはどんなに悲しくてつらい事でも、いつかは心の中で折り合いをつけて昇華できる力があるといいます。ですから、すべての経験が、今後思い出となり、子どもたちのこれからの生きる力になってくれたらいいなと思います。

そして、これから始まる夏休みには学校ではできない体験をたくさんしてほしいと願っています。

それでは、少し早いですが、保護者の皆様、地域の皆様、1学期の本校の教育活動にたくさんのご理解とご協力を賜りました。ありがとうございました。

親という字は木の上に立って
子どもが帰ってくるのを見ているんだよ

何のこと?と思われたかもしれません。先日、5年生が、国語の時間に漢字の成り立ちを学習しているのを見ていて、今から20年ほど前に、私が勤めていた学校の校長先生が、教育講演会で話された言葉を思い出しました。それがこの題名です。「親という字は、木の上に立って、子どものことを見ているのです。そして、じっと帰りを待っているのです。もし、子どもがそれ以上行ってはいけないところに行ったら、木から飛び降りてすぐに連れ戻すのです。でも、そうでなければ、じっと帰りを待っていればよいのです。」という意味のお話だったように思います。本当の漢字の成り立ちとは違うようですが、ちょうど子育て期真っ最中の私には、ものすごく心に響く言葉でした。

もちろん、子育てには段階がありますから、しっかりと手をかけなければいけない時期もあります。人間はあらゆる動物の中で最も社会的に未熟な状態で生まれるといわれているように、乳幼児期にしっかりと愛情を注ぎ、丁寧な子育てすることはとても大事です。しかし、いつまでもそれを続けていると、子どもはずっと未熟なままです。子どもが自ら考え、行動していくことができるよう、少しずつ親は木の上に立って子どものことを見るようにしていかなければなりません。では、それは、いつなのでしょうか。知りたいところですが、一人一人の子どもによって違うので、それは何とも言えません。ちなみに、私の場合は、気づいたらすでに木の上にいたように思います。子育てって、案外そんなものかもしれませんね。